

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520050

研究課題名(和文) 瑜伽行派における、空・無我の思想と利他行・衆生救済の関係に関する考察

研究課題名(英文) A study on Yogacara's view of the relationship between Selflessness and relief of sentient beings

研究代表者

高橋 晃一 (TAKAHASHI, Koichi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・特任研究員

研究者番号：70345239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：大乘仏教はアートマンの存在を否定し、無我を標榜する一方で、衆生救済の実践を重視する。さらに唯識説に立脚し、外界の存在を否定するとき、他者救済の実践は意味を失わないのであろうか。こうした問題意識のもと、瑜伽行派の文献を精査し、以下の結論を得た。瑜伽行派にとって、唯識の境地の体得は修行者が目指す最終的な到達点ではない。むしろ唯識を実感したうえで、さらに衆生を大乘仏教に教導することが求められている。経験的世界は複数の衆生の認識の上で成り立っており、一人の修行の完成によって消滅したりしない。心による世界の成り立ちと、菩薩の実践の意義を体系的に捉えている思想といえる。

研究成果の概要(英文)：As is well known, the Selflessness of all existence is the most important philosophical standpoint in the Mahayana Buddhism. It is, however, demanded that bodhisattvas, practitioners of Mahayana Buddhism, should behave for other people according to their practical ethics. Is there any contradiction between the Selflessness and the ethical activities, because the Selflessness can be regarded as negation of individual soul? Investigation of Yogacara works shows following results with regard to these issues.
The Yogacara, one of the Mahayana schools, claims the mind only theory which denies the external world through the meditation. However, attaining this state is not their ultimate goal. They teach that a yoga meditator can save ordinary people from sufferings only after realizing the mind only. It should be considered that the mind only theory cleverly integrates the framework of the world experienced by us and the practical ethics of bodhisattvas who recognize this framework.

研究分野：インド哲学仏教学

キーワード：瑜伽師地論 無我 菩薩道 衆生利益

1. 研究開始当初の背景

仏教が標榜する「諸法無我」という立場は、突き詰めれば日常の経験世界において「人」として認識されるような存在は本質的には実在しないということになる。しかし、一方で仏教は宗教思想であり、他人の救済を目指すものでもある。これは他者の存在を前提にして成り立つ実践倫理でもある。

これまで無我説を研究対象とするとき、インド哲学諸派におけるアートマン説との対立構造や、仏教における輪廻の主体の問題に関心が寄せられることが多かった。しかしながら、異なる視点での指摘もなされている。

(1) 高崎直道博士の論稿「唯識・如来蔵思想の人間観」(『東洋における人間観』: 東京大学出版会、1987)では、仏教の人間観として、「輪廻の主体」「無我」という観点のほかに、インド固有の社会身分制度であるヴァルナ制を否定した「平等観」をあげており、大乘仏教ではそれに加えて慈悲・利他という視点が強調されることを指摘している。

(2) 桂紹隆博士の「インド仏教の思想史における大乘仏教」(『シリーズ大乘仏教 1 大乘仏教とは何か』: 春秋社、2011)では、仏教内部にも人格主体の存在を認める立場があり、教理体系を厳格に重んじる人々から批判されながらも、勢力を保っていた事実が指摘されている。この論稿において、瑜伽行派は表面的には人無我説を標榜し、個人的な人間存在を否定するが、本質的には人間存在を肯定する思想と相通じる思想を保持していたとされ、それが瑜伽行派特有の「無我・空性」説に関連する可能性が示唆されている。

「人」の存在を扱う場合、単に個的存在者としての人間を教理的に分析することだけでは不十分であり、他者との関係で捉える視点が必要である。この点で、上記の論稿は無我説を扱う文献の単純な分析にとどまらず、仏教の「人間観」という視点に立っている点で極めて重要な指摘と言える。しかしながら、これらの論稿では無我説と衆生救済を関連付けて論じられてはいない。

2. 研究の目的

「無我説」はいわば仏教思想の人間観である。開祖ブッダ以来、仏教はこの無我の思想を標榜し、インドの伝統で認められてきたアートマンを否定したことはよく知られている。これはアビダルマ思想において、人無我説として理論的な発展を遂げ、さらに大乘仏教に至って「人法二無我説」に発展し、すべての存在は恒常普遍の本質を持たないこととして理解されるようになる。この見解を推し進めていったとき、「一切法無自性空」として、すべての存在の実在性を否定する立場が表明されるようになった。そうした思想は『般若経』や、それを受けた中観派の開祖ナーガールジュナ(二―三世紀)の『中論』に見られる。しかし、中観派と並び立つ大乘仏教の一学派である瑜伽行派(四世紀頃の成

立)の思想的立場から見たとき、「無我」「空」という概念は必ずしもすべての存在を根底から否定するものではない。瑜伽行派の「無我」「空」理解は明らかに中観派とは異なり、「無我」「空」という状態でも、否定しきれない何モノかが残存すると考える。この否定しきれない存在を、瑜伽行派ではヴァストゥと呼んだ。否定しえない実在であるヴァストゥが、言語表現による概念化を離れた状態を、瑜伽行派は「無我」「空」と解釈した。

こうした見解は瑜伽行派の最初期の思想を伝える文献である『菩薩地』に見られる。また『菩薩地』はその名の通り、大乘の実践者としての菩薩のあり方を説いており、衆生を利益し、大乘仏教に教導することを目指している。いわば他者を念頭においた菩薩の実践倫理思想でもある。本研究は、『菩薩地』に見られる「空」「無我」の哲学的概念と菩薩の実践の関係を考察することにより、大乘仏教の人間観を考察し直すことを目的としている。

3. 研究の方法

1. 『菩薩地』「自利利他品」「力種姓品」の校訂テキスト・訳注の作成(校訂に際して、従来用いられていない写本一本を含む四種の写本を用い、漢訳三種、チベット語訳を参照する。)
2. 無我および救済に関する先行研究の整理

上記の方法に基づいて『菩薩地』の内容分析を行う。また、『菩薩地』全体を俯瞰すると同時に、関連する瑜伽行派の諸文献を参照しながら、大乘における衆生救済という視点から見た『菩薩地』の無我説の意義を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 『菩薩地』における身体観の解明

初期仏教から大乘仏教に至るまで重要視された瞑想法に四念処(四念住)がある。この四念処は身・受・心・法に関する四種の随観に密接に関わっており、それに応じて身受心法の四つの念処が説かれる。四念処の内容に関しては、阿含・ニカーヤにおいて異同があり、またアビダルマにおいては観想法の解説にとどまらず、哲学的な解釈が施されるなど、思想史的な発展が見られることがすでに知られている。ただし、基本的には不浄観や四顛倒と深く関係している。例えば、修行者は身体に関して、その不浄性や無常性を洞察し、執着を離れるよう努める。

本研究で考察対象とする『菩薩地』も三十七菩提分法を説明する際に四念処に言及している。その記述は極めて簡潔で、身体に関する随観のみを説明し、あとは省略されているが、その要点は「菩薩は、身体を身体として存在するものと構想しないが、全く存在しないと見るわけでもなく、身体は言語表現し

得ない本質を持っていることをありのままに理解する」というものである。「言語表現し得ない本質」は『菩薩地』の思想の中核にある概念であり、その背景には言語表現を超えた実在が想定されている。したがって身念処に関していえば、身体をある意味で肯定的に捉え直していると言える。少なくとも『菩薩地』では単に身体を不浄、無常なものとして観て厭離するという発想が見られない。これは瑜伽行派以前の思想との顕著な相違点と言える。

(詳細および関連する諸研究は、本報告の〔雑誌論文〕⑤を参照。)

(2) 瑜伽行派の思想における他者の分別

周知のように瑜伽行派は唯識思想を主張し、外界の認識対象の実在性を否定している。当然のことながら、その外界の中には他の衆生の存在も含まれる。しかし、大乘仏教は衆生救済を標榜しているため、唯識という立場に立ち、他者の存在を自己の認識の所産と見なすことは、大乘の基本的な理念と抵触する印象を受ける。

これに対して唯識への悟入は瑜伽行派の思想において到達点ではなく、衆生の教導という目的に到達するための過程に過ぎないとも言われている。これを踏まえて唯識文献を見なおすと、例えば『成唯識論』では、資糧位・加行位・通達位・修道位・究竟位の修行の階梯の中で、第二番目の加行位で所取・能取を離れた唯識性を了解し、通達位以降でさらなる真理へと昇華させると同時に、衆生を唯識性の理解に導くことが説かれている。また、『撰大乘論』も加行道において唯識へ悟入した後、菩薩の十地の初地にあたる歡喜地に入り、六波羅蜜に集約される菩薩行の実践が行われることになることと説いている。このように瑜伽行派の思想において、唯識性は修行の完成の境地ではなく、菩薩行の入り口であり、教導されるべき他者との関わりが重要な意味を持っている。

瑜伽行者の修行の完成と他の衆生の存在の関わりについて、最も端的に述べているのは『撰大乘論』であろう。それによれば、一人の修行者が唯識性を証得したとしても、他の人々の判断(分別)がはたらいている限り、外界に相当する器世間が消滅することはないという。その背景に『瑜伽師地論』『撰決択分』があることはすでに指摘されておりだが、これらに共通しているのは他の衆生の存在によって、われわれが共有する経験的な世界が意味づけられている点にある。ここで言う「撰決択分」は『菩薩地』の解説部分であり、いわば『菩薩地』の思想の延長上に表れた思想である。この「撰決択分」では、他者の存在が前提とされており、それらの他者の認識によって経験世界が成り立つことを明示している。

(詳細および関連する諸研究は、本報告の〔雑誌論文〕①を参照。)

(3) 『解深密経』の成立史に関する一考察

① 『解深密経』はインド大乘仏教の一派である瑜伽行派の経典である。その内容は『菩薩地』の思想を踏まえながら、より発展した唯識説を解説し、その上で菩薩の修行体系を明らかにしている。先行研究では、この経典は起源と年代を異にする複数のテキストを編纂したものと考えられている。この見解の裏付けとして、「部分訳」の存在があげられてきた。この経典を初めて中国に伝えたのは求那跋陀羅(三九四―四六八年)という人物で、彼の翻訳は一般に『相續解脱経』と呼ばれるが、『解深密経』の最後の二章に相当する部分訳である。しかし、『相續解脱経』の体裁からは、『瑜伽師地論』『撰決択分』に引用された『解深密経』の特徴が見られるとの指摘もあり、また求那跋陀羅が訳出し、現在では欠本となってしまった『第一義五相略』という文献が、『解深密経』の他の部分に対応する訳であることも指摘されている。その根拠は吉蔵(五四九―六二三)が『五相略経』という名称で引用する断片が、『解深密経』の三時教判に一致していることによる。これらは、求那跋陀羅は最後の二章だけでなく、『解深密経』の他の章も知っていたことを示唆している。こうした指摘を改めて精査し、求那跋陀羅が五世紀初頭にすでに『解深密経』の全体を中国に伝えていたことを実証した。

(詳細および関連する諸研究は、本報告の〔雑誌論文〕④を参照。)

② 上記の考察により、『解深密経』の成立に関して再考の余地があることが明らかになった。これを踏まえて、合冊編纂説のもう一つの根拠である「結文」について考察を加えた。『解深密経』の結文とは、章末におかれた締め括りの一節であり、一般的な経典末尾の流通分に似ていることから、この経の各章は本来は単立の経典であった根拠とされてきた。しかし、その文言を見る限り、一般的に経典の結末に見られる「歡喜奉行」という表現がなく、単立の経典を合冊編集した場合に見られるような痕跡とは言えない。また、結文を並べてみると、菩薩が得る果報は一連の文脈を形成している可能性が指摘できる。したがって、後半のいくつかの章が単純に継ぎ足されたとは考えにくい。こうしたことから、結文を経典編纂の痕跡と見ることは再考の余地があることを結論付けた。

(詳細および関連する諸研究は、本報告の〔雑誌論文〕③を参照。)

以上の点から、『解深密経』は雑多な経典の寄せ集めではなく、明確な編集方針にしたがって作成された文献である可能性を明らかにした。『解深密経』は『菩薩地』の思想を継承しながら、唯識説を説くと同時に菩薩の修行実践まで解説する経典である。本研究課題では当初は視野に入れていなかった文

献ではあるが、その成立事情を明らかにすることは、『菩薩地』以降の思想的発展を解明し、『菩薩地』の思想史上の意義をより明確にするために必要であると考えて分析を試みた。予期以上の成果を上げることができ、特に①の内容に関する研究論文では、東方学会賞（第33回、平成26年度）を授与されており、高い評価を受けている。しかしながら、『解深密経』における「無我」と「衆生救済」という観点での分析にまでは至らなかった。今後の展望として、『解深密経』の全体にわたる思想内容の再考察を行う予定である。

(4) 『菩薩地』における大乘経典の位置づけ

大乘経典は「菩薩藏」とも呼ばれ、また「広大な教え」という意味で「方広」とも呼ばれる。この「方広」は伝統的な経典分類法である十二分教中の方広部を指す術語であり、『菩薩地』「力種姓品」は大乘経典である菩薩藏を方広部であると明言し、伝統的な経典分類の中に収める。しかし、『菩薩地』は「功德品」では菩薩藏は十二分教よりも広大であるとも述べている。こうした表現を可能にしたのは「方広」という単語の二義性による。すなわち、伝統的な仏説分類法である十二分教としての「方広部」を指し示す一方で、一般的な抽象名詞として「広大であること」を意味する語でもあるため、『菩薩地』は掛詞として「方広」という表現を用い、大乘経典を伝統説の中に位置づけながら、それを越える広大な典籍であることを示そうとしたと考えられる。『菩薩地』の記述は簡潔で、詳細な背景などは分らないが、その影響下にあったと思われる『莊嚴経論』やそれに対する注釈、また中国やチベットでの解釈では、菩薩藏という概念が「方広部」という一部門に収まるのではなく、仏説の総体を包含する十二分教や三蔵の全体に関わると見なされていた。こうした理解の背景に、『菩薩地』「功德品」の「教法の大なること」があったと考えられる。

上記の成果は、研究計画において考察対象としていた『菩薩地』「力種姓品」の一節を分析する過程で明らかになった。

(詳細および関連する諸研究は、本報告の〔雑誌論文〕②を参照。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 高橋 晃一、Conceptualization (*vikalpa*) of Other Sentient Beings in the Early Yogācāra texts、印度学仏教学研究、査読有、65-3、2017、198-204
- ② 高橋 晃一、『菩薩地』における菩薩藏 (*bodhisattvapitaka*) の位置づけ、インド哲学仏教学研究、査読有、24、2016、

41-62

- ③ 高橋 晃一、『解深密経』の結文に関する考察、インド哲学仏教学研究、査読有、21、2014、65-80
- ④ 高橋 晃一、求那跋陀羅訳『相續解脱経』と『第一義五相略』—『解深密経』の部分訳に関する疑問—、東方学、査読有、127、2014、18-34
- ⑤ 高橋 晃一、Observation of the Body in the *Bodhisattvabhūmi*: Significance of the *kāyānupaśyanā* in the early Yogācāra philosophy、印度学仏教学研究、査読有、61-3、2013、1197-1203

〔学会発表〕(計3件)

- ① 高橋 晃一、初期唯識文献における「他人の分別」、日本印度学仏教学会第67回学術大会、2016年9月3日～4日、於東京大学(東京都文京区)
- ② 高橋 晃一、『菩薩地』と『解深密経』のvastu観の比較、日本印度学仏教学会第65回学術大会、2014年8月30日～31日、武蔵野大学(有明キャンパス)(東京都江東区)
- ③ 高橋 晃一、『菩薩地』における身体観、日本印度学仏教学会第63回学術大会、2012年6月30日～7月1日、於鶴見大学(神奈川県横浜市鶴見区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 晃一 (TAKAHASHI, Koichi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・特任
研究員
研究者番号：70345239